

# 中学校国語科における電子黒板を活用 にむけた教材開発

～言語力を育成する教材パッケージの作成と提供～

寝屋川市立第二中学校

〒572-0036  
大阪府寝屋川市池田日待ち27-7

## 1. 本研究の背景

2010年度夏期に、本校に電子黒板が2台配布され、そのときから各教科のなかで、これまであるプロジェクタと合わせてどのように利用するのかについて、知見を蓄積してきた。たとえば電子黒板は大きく重たいので、特定の特別教室に常設し、各教室ではプロジェクタを利用する棲み分けるなど、それぞれの部屋でできる実践を教員間で議論した。とくに国語科の実践では、電子黒板の導入以前よりコンピュータやプロジェクタを利用して、言語力の育成に力を入れてきており、その知見が電子黒板の利用に活かされている。

一方で、2010年頃に近隣の中学校ではあまり電子黒板を利用されておらず、教員は利用方法に困惑していた。それはwebにおいても利用した実践報告があまり見かけられず、また教科で利用できるコンテンツがあまりないことが原因だと考えた。

そこで国語科の知見の共有を目指して、言語力育成を目標とした電子黒板用コンテンツ、電子黒板を用いてコンテンツを活用した授業プランをセットとした学習パッケージの作成を目標とした実践研究をすすめた。言語力育成のために、とくに「読む力」「書く力」「考える力」「伝える力」といった力の育成ができる学習場面を意識しながら、学習パッケージを作成することを留意した。

## 2. 実践の取り組み

### 2.1 実施計画の変更

2011年度当初に計画していたことはほぼ達成できなかったため、実施計画時期の変更を迫られた。当初の計画を達成できなかった理由は2つある。まず1つ目は、生徒が活発だったため学級経営が難しかったことにある。そのため授業の中身よりも、まずは授業規律を確立することに重点を置き、半年かけて指導した。2つ目は耐震工事のため電子黒板を常設していた特別教室が使用できなくなったことである。これらの悪条件のなかで電子黒板を利用するために常設型のものではなく、持ち運びのできるインタラクティブボードを利用することとした。

#### 1. 開発するコンテンツの検討（計画）

電子黒板用コンテンツの開発は、実践を行う単元に合わせて、学期ごとに作成した。コンテンツ開発の手順には、3つのステップのサイクルで実施した。

言語力を育成するポイントの設定やその方略について教員グループで議論し、開発に取り掛かる。

コンテンツの開発は、授業の目的に応じて学習プリントも同時に開発する。また事前に検討し、適宜外部の教員の意見を得られるように事前に計画を Web に公開し、意見を集める。

## 2. コンテンツの作成（作成）

作成したコンテンツ案に基づき、コンテンツの作成を行う。その際、言語力のどの部分に関係しているのかについて留意しておく必要がある。

## 3. 授業実践（実践）

作成したコンテンツを活用した授業実践を行う。その際の様子など記録し、電子黒板になれていない教員が、同様に実践ができるよう授業プランを作る。授業プランは、言語力育成を行う上での発問や生徒の様子、授業の流れを記述したものである。

これらの手順により、表1のものが成果として完成した。

表1 年内の実践とコンテンツ

時期	単元名	開発コンテンツ ※ () は、利用した市販のコンテンツ
1 学期	ホテルの里づくり（説明文）	・教科書の内容に即した説明用コンテンツ
	熟語の構成（言葉の広場）	・教科書の内容に即した説明用コンテンツ ・問題コンテンツ
	短歌の世界	・教科書の内容に即した説明用コンテンツ ・短歌の鑑賞および短歌のクイズ
	副詞・連体詞（文法）	・説明，問題および解答
2 学期	わたしが一番きれいだったとき(詩)	・教科書の内容に即した説明用コンテンツ ・音読を深めるコンテンツ
	平家物語【読む・古文】	・場面や人物の様子を思い描きながら，文語文の部分を朗読し，味わうコンテンツ
	徒然草【読む・古文】	・古文・古語の意味とはたらきに注意しながら，文章の内容を理解するコンテンツ
	走れメロス【読む・小説】	(・朗読テープ) (・「走れメロス」ビデオコンテンツ)
	接続詞・感動詞（文法）	・説明および問題，解答
3 学期	漢詩の世界【読む・漢文】	・漢詩独特の表現の仕方や漢詩の特徴について学ぶコンテンツ
	枕草子【読む・古文】	・古文・古語の意味とはたらきを理解する説明
	対義語（言葉の広場）	・フラッシュカード方式の問題
	アンネの日記(投げ入れ教材)	・アンネの生涯を説明する資料などフラッシュで作ったコンテンツ (・映像コンテンツ)

※ 単元ごとに新出漢字用フラッシュコンテンツを作成

## 2. 3 ICT コンテンツと実践事例

事例1 「わたしが一番きれいだったとき」(茨木のり子作)

この事例では、2年生で二度目の詩を扱う単元だったので、教科書の内容に即した説明用コンテンツを作成した。とくに重視したことは、詩を読み「わたし」の気持ちが時代背景を踏まえて想像できるようにすることである。そのために生徒が想像することと考えることが重要だと考えた。そこで生徒が当時のことをイメージしやすいように、時代背景を象徴する画像を配置した。また生徒

が考える時間を保障するために、本文や説明の板書時間の一部を減らすために、コンテンツにそったプリントも合わせて利用した。

授業での利用は、当初戦時中の話をイメージすることができずに、詩の内容を不思議に感じていた生徒も時代背景をイメージさせることで、詩のイメージを把握できているように感じられた。またコンテンツとプリントを利用することで、前年度までの同単元よりも1.5倍の速度で進行することができたため、予定よりも1時間分早く終わることができたので、その時間で学習の内容を深めることができた。また、詩を黒板に大きくうつしだすことによって、生徒の顔も上がり音読指導がし易かった。

## 事例2 対義語（言葉の広場）

この事例では、生徒が対義語について理解および定着させることを目的として、繰り返し提示できるフラッシュ型コンテンツを作成して、授業を行った。対義語の学習は、1つ1つの言葉の意味を知るのはもちろん重要であるが、まずは対義語に触れて面白いと生徒が思うことを重視した。そのため全体の構成をクイズの形式で作成した。

授業時での利用は当初意図した通り、生徒が積極的に進んで解答を述べていた。対義語に触れて面白いと思わせることは達成できたと考えられる。授業時に留意することは、教師が教えるという役割で授業に臨むのではなく、授業を進める司会者として授業を展開することである。今回のICTを利用した授業は、対義語の導入としての位置づけており、繰り返し問題を答えさせたり、授業の中で間違えることによって、より理解を深めることにもつながった。

## 3. 本研究の成果

### 3-1 作成・公開コンテンツの成果

言語力を育成するための電子黒板用コンテンツを利用する教員の意図に合わせて編集することができるようにプレゼンテーションソフトで作成した。作成したコンテンツは、単元ごとの教科書のコンテンツと日本語の単語の品詞について、学年ごとの新出および頻出漢字のコンテンツである。しなしながら単元ごとのコンテンツは、教科書の本文を引用した箇所や教科書の絵を利用している箇所が複数あるため、web上には公開していない。そのため一般公開しているコンテンツ数は25である。

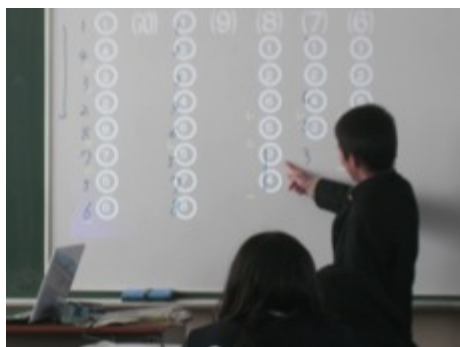


写真1 授業時の生徒利用



写真2 授業時の教員利用

### 3-2 生徒らへの言語力育成への影響

本取り組みを行った結果を評価するための学期の終わりに国語の授業についての選択式アンケートと身に付いたことや分かりやすかったことを問う自由記述アンケートを設定して、実施した。その結果、ICTを利用して教育することにより生徒らへの成果として、生徒らに物語の場面イメージの提供、基礎基本の力の定着、学習することへの親しみ、が確認できた。

生徒らに物語の場面イメージが提供できたとは、生徒らのアンケートに「長文読解（走れメロスやホテルの里づくり等）の単元がイメージしやすかった」といった各単元の内容が、分かりやすかったという記述が多く見られた。それは教科書に書いている文字の情報（抽象）とその場面をイメージできる写真等の資料（具体）を接続したことによる成果であると考えられる。特に長文読解の場面では、情景をイメージしながら読む力が求められる。しかし生徒によってはそれをすることが難しい者もある。その生徒に作用し、生徒全体の理解の水準を高めたのだろう。

基礎基本的な力の定着とは、選択式アンケートの結果、全体の8割以上の生徒が国語の力が身に付いた、また同程度の生徒が良く分かったと解答していた。この結果からほとんどの生徒が電子黒板用のコンテンツを利用することによって、国語の基礎基本的な力の育成ができたと考えられる。また自由記述には、「古文の内容の大意がつかみやすくなった。」、「漢字がたくさん覚えられた。」といったフラッシュカードとして利用したものが身に付いたことが報告された。

また母集団が違うので明確な比較をすることはできないが、学期ごとの試験成績の全体平均が高かった。

学習することへの親しみは、選択式アンケートと自由記述の結果より示される。選択式アンケートを解答した生徒のほとんどは、国語が好き、国語が楽しいと解答した。また自由記述では特に顕著で、「T先生の授業を受けてから、国語が好きになった」といった記述が見られた。

上述のことから、言語力を育成することを意図して電子黒板用のコンテンツを作成、利用したことによって、生徒に対して効果があったと言える

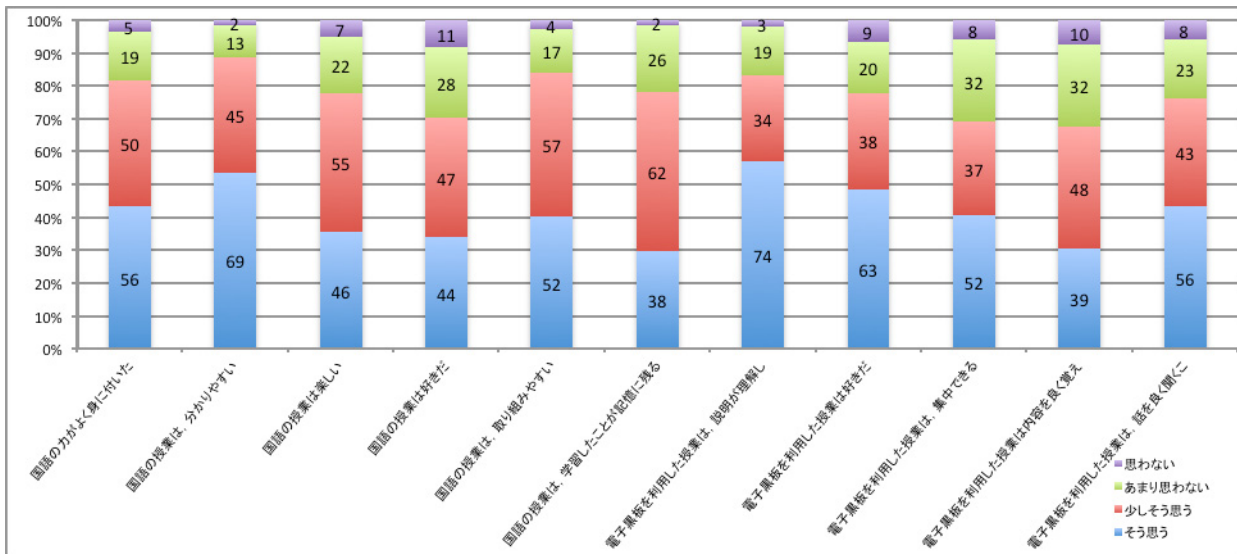


図1 アンケート結果

#### 4. 今後の活動計画

近隣校では、現在も電子黒板を利用できていない学校がある。本研究はそれらの学校に対して意義がある。著作権があるため、作成・利用したコンテンツをすべて web 上で公開することができなかったが、オリジナルの教材は利用できるようにしている。そのため利用することに躊躇している教員の足場掛けとなっているだろう。

本実践は継続して取り組み、現在も新学期から利用することのできるコンテンツを積極的に開発している。それらのコンテンツは実践後、コンテンツとどのように利用したのかをセットにして web に更新していく予定である。